



THE FUKUOKA  
ASIAN CULTURE PRIZES

**THE 15th  
FUKUOKA ASIAN CULTURE PRIZES 2004**

---

2004年(第15回)福岡アジア文化賞

2004年(第15回)受賞者

大賞

GRAND PRIZE



アムジャッド・アリ・カーン

Amjad Ali KHAN

サロード奏者

Sarod Maestro

1945年10月9日生

Born October 9, 1945

インド

India

## 略 歴

- 1945 インド、マッディヤ・プラデーシュ州グワーリヤルに生まれる
- 1951 サロード演奏を始める
- 1958 コルカタ(旧カルカッタ)でソロの演奏家としてデビュー
- 1963 初の海外ツアー(アメリカ)
- 1964 最初のレコード『ラーガ・カウシ・カンナダ』リリース
- 1970 国際ミュージック・フォーラムよりユネスコ賞
- 1973 父の名を冠した「ハーフィズ・アリ・カーン・メモリアル・ソサエティー(現トラスト)」設立
- 1975 インド政府よりパドマ・シュリー章
- 1989 インド国立文化機関よりターンセーン賞
- 1989 初来日公演(95年、2度目の来日公演)
- 1991 インド政府よりパドマ・ブーシャン章
- 1991 第1回世界芸術サミットにインド代表として参加(イタリア、ヴェニス)
- 1994 イギリス、ヨーク大学でインド人初の客員教授。97年同大学から名誉博士
- 1996 ユニセフ親善大使
- 1997 ニューヨーク、カーネギーホールでインド独立50周年コンサート
- 1997 世界経済フォーラムよりクリスタル賞
- 1999 ダライ・ラマと「世界聖なる音楽祭」を立ち上げる
- 2001 インド政府よりパドマ・ヴィブーシャン章
- 2002 ロンドン、ロイヤル・フェスティバル・ホールで音楽活動50周年記念コンサート
- 2003 「WOMAD」(音楽とダンスの世界)フェスティバルに参加(オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、カナリア諸島、シンガポールの各地で公演)

※上記以外に、イラン、ネパール、シンガポール、アラブ首長国連邦、オーストラリア、モーリシャス、チェコ、フランス、イギリス、アメリカ、香港など、世界各地で多数公演。

## 主な作品

- (CD) 『サダーヤン:エヴォケーション』(ナヴラス・レコード, 2002)  
※以下、記載のないものは同社から発行  
『サロード・フォー・ハーモニー』(2002)  
『北インド/瞑想のサロード』(ビクターエンタテインメント, 2000)  
『ライブ・50th バースデー・コンサート』(1997)  
『ラーガ・バイラヴ』(1995)  
『ラーガ・シュリー・アンド・カマジー ライブ・イン・ニューデリー1994』(1995)
- (ビデオ) 『マエストロ・アマジャッド・アリ・カーン』(グルザール, 1990)  
『アマジャッド・アリ・カーン サロード・コンサート』(日本ビクター株式会社, 1989)

アムジャッド・アリ・カーン氏は、インド古典音楽の弦楽器で極めて高度な演奏技術を必要とする「サロード」演奏の巨匠である。インド国内のみならず、国際的にも広く活躍し、高い評価を受けている音楽家である。

カーン氏は、ムガル帝国に仕えた伝説的な宮廷音楽家ターンセーンの楽派に属する音楽一家の6代目で、著名な演奏家である父親、ハーフィズ・アリ・カーン氏の指導のもと、300年余にわたって伝承されてきた古典音楽の技法や形式を忠実に継承している。一方で新たなラーガ(旋法)を創作し、従来のレパートリーに今までにない形態を加え、さらに演奏のスタイルや技巧を改革するなど、サロードの世界に革新的な音楽的生命を吹き込み、同氏独自の音楽文化を築きあげた。

古典音楽が比較的高齢層に支持され、若年層と乖離<sup>かいり</sup>し、伝統の衰退や文化の画一化が危ぶまれる現状を憂い、「古典音楽とポピュラー音楽とは本質的に差はない」という思いから、伝統の継承と発展を意図し、国内外の教育機関でワークショップを行い、世界各地で開催されるワールド・ミュージックの祭典<sup>ウオーマッド</sup> WOMADに参加するなど、若い世代にも古典音楽の理解を深めるための積極的な努力を続ける同氏の活動は、サロード音楽に広範な支持者の層を拡げるといふ大きな成果をもたらした。

カーン氏は、「音楽はあらゆるものを超える」という信念のもと、1981年にインド—パキスタン間の25年に及ぶ文化的断交を打破するために、パキスタンでインドの音楽家として初めて演奏し、両国間の文化交流の糸口を開いた。そのほか長年にわたり障害児支援活動などを積極的に行い、ユニセフ親善大使に任じられるなど、音楽を通して果たした社会的役割も大きい。

アメリカのカーネギーホール、イギリスのロイヤル・フェスティバル・ホール、日本のサントリーホールなど、世界に名だたるホールでコンサートを行うなど、世界各地で多くの聴衆を魅了している。

カーン氏は時代を超える豊かな音楽を紡ぎだすその音楽性と、音楽に対する信念と情熱をもって、インド古典音楽の継承と発展に大きく貢献し、アジアの音楽とその精神を世界的に広く伝えている。その功績は、「福岡アジア文化賞 — 大賞」として真にふさわしい。

2004年(第15回)受賞者

## 学術研究賞

# ACADEMIC PRIZE



リ・イーニン  
厲以寧

LI Yining

北京大学光華管理学院院長

Dean, Guanghua School of Management,  
Peking University

1930年11月22日生

Born November 22, 1930

中国

China

## 略 歴

- 1930 中国、江蘇省に生まれる  
1955 北京大学経済学部学士  
1955 - 83 北京大学助手、講師、助教授  
1983 北京大学教授  
1985 - 92 北京大学経済管理学部長  
1988 全国人民代表大会常務委員会委員  
1988 国務院環境保護委員会科学顧問  
1991 環境と開発に関する国際協力中国委員会委員  
1992 - 97 全国人民代表大会法律委員会副主任委員  
1993 中国国際理解協会副会長  
1993 全国環境保護局顧問  
1993 - 94 北京大学工商管理学院院长  
1994 - 北京大学光華管理学院院長  
1997 環境と国際協力発展賞  
1998 香港理工大学名誉博士(社会科学)  
1998 - 2002 全国人民代表大会財政経済委員会副主任委員  
1999 - 中日関係史学会会長  
2003 - 第10回全国政治協商会議常務委員、全国政治協商会議経済委員会副主任委員

## 主な著作

- 『教育経済学』北京出版社, 1984  
『体制・目標・人: 経済学面臨的挑戰(体制、目的、人: 経済学が直面する挑戰)』黒龍江人民出版社, ハルピン, 1986  
『社会主義政治経済学』商務印書館, 1986  
『国民経済管理学』河北人民出版社, 河北, 1988 [改訂版: 1998]  
『中国経済改革的思路(中国経済体制改革の探索)』中国展望社, 1989  
『非均衡的中国経済(非均衡の中国経済)』経済日報出版社, 1990 [再版: 広東経済出版社, 広東, 1998]  
『中国経済改革与股份制(中国の経済改革と株式制度)』北京大学出版社および香港文化教育出版社, 香港, 1992  
『股份制与現代市場経済(株式制度と現代市場経済)』江蘇人民出版社, 江蘇, 1994  
『轉型發展理論(轉型發展理論)』同心出版社, 1996  
『超越市場与超越政府 — 論道德力量在經濟中的作用(超越市場と超越政府 — 經濟における道德力の作用について)』経済科学出版社, 1999  
『資本主義的起源 — 比較經濟史研究』商務印書館, 2003  
『厲以寧北京大学演講集』経済科学出版社, 2003

※すべて中国語で出版

※出版地の記載のないものは北京にて出版

厲以寧氏は、中国を代表する経済学者で、1980年代以来の中国の経済発展をもたらした改革を理論的に先導してきた。

厲氏は北京大学経済学部を卒業後、若手の経済学者として囑望されはじめた1957年の反右派闘争中に右派分子として批判され、文化大革命期(1966-76)には農村に下放される苦難を経験した。しかし1978年に名誉を回復され、始まったばかりの経済改革に対する大胆な理論的提言で注目されるようになった。

厲氏の経済改革への理論的貢献は、なによりもまず経済改革のカギが所有制の改革にあり、そのゴールが国営企業の株式化にあることを提起した点にある。1980年代半ばまで、経済体制改革については価格改革優先論が主流であったが、同氏は所有制改革優先論を掲げて、「価格改革は企業にとって競争環境をつくるにすぎず、所有制改革こそが利益、責任、刺激、発展の推進力に係わる問題を解決する」と主張した。この主張の正しさは、1988年に、急ぎすぎた価格改革が深刻なインフレをもたらし、経済改革自体を危機に陥れたことによって立証された。そして優先すべき所有制改革の目的は、損益に責任をもつ企業の創出にあるとし、そのために損益責任があいまいな国営企業の改革を「株式化」によって推進することを主張した。そのため同氏は「厲<sup>リー</sup>股份(株式の厲)」とも呼ばれた。こうした同氏の所有制改革の理論と政策提言は、現実の中国経済の改革と成長に大きく貢献し、国際的にも高く評価された。

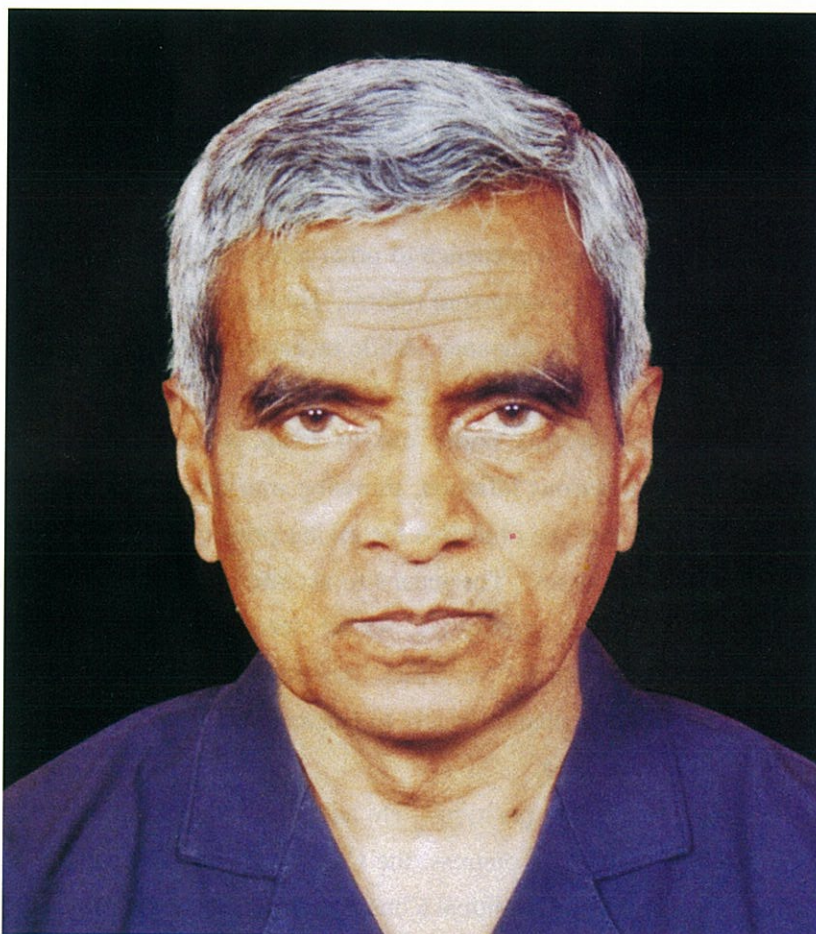
厲氏は中国の国会にあたる全国人民代表大会の中枢機関である常務委員会の委員や諮問機関の政治協商会議全国委員会委員など数多くの要職を歴任し、財政経済政策の立案にも関与してきた。また、北京大学に創設された中国でトップレベルのビジネススクールである光華管理学院の院長を長く務めて、若手の経営者、経済テクノクラートや経済学者など、産官学にわたる数多くの人材を育成している。さらには日中友好21世紀委員会の中国側委員や中日関係史学会会長なども歴任し、日中両国の友好関係の発展にも貢献している。

中国経済の発展は21世紀の世界、特に日本を含めたアジア地域の経済にますます大きな影響を及ぼすとともに、継続的な発展への新たな挑戦とも言われる。厲氏の研究実績と幅広い活動は、その中国経済の発展に理論的道筋を与えたものであり、まさしく「福岡アジア文化賞 — 学術研究賞」にふさわしいといえる。

2004年(第15回)受賞者

## 学術研究賞

# ACADEMIC PRIZE



ラーム・ダヤル・ラケーシュ

Ram Dayal RAKESH

王立ネパール学士院文化部門長

Chief, Department of Culture, Royal Nepal Academy

1942年7月25日生

Born July 25, 1942

ネパール

Nepal



## 略 歴

- 1942 ネパール、ジャナクプル県シソウティア村に生まれる
- 1962 インド、ビハール大学学士(英語学)
- 1965 カトマンズ、トリブヴァン大学修士(ヒンディー文学)
- 1966 マヘンドラ・ヴィディヤール・ブーシャン2級章(ゴールド・メダル)
- 1966-92 トリブヴァン大学人文学社会科学部教授。同大学附属パドマ・カニヤール・カレッジ(66-71年)、国際言語分校(77-79年)教授を兼任
- 1968-70 王立ネパール学士院より研究費をうけてミティラー文化の研究。人文学社会科学研究所からの交付研究費でカトマンズ盆地におけるネワール人の生活形態について研究
- 1975 インド、デリー大学博士(文学)
- 1976 マヘンドラ・ヴィディヤール・ブーシャン1級章
- 1993-94 学位取得者特別研究費を得てアメリカ、インディアナ大学にて研究
- 1994-95 ネパール選挙管理委員会共同事務局長
- 1995 ネパール教育課程開発センター所長
- 1996 ネパール私教育センター長
- 1996 トリニダード・トバゴにおける文学への貢献に対し、同国首相より国際名誉章
- 1999 ミティラー女性能力開花センター設立
- 1999- 王立ネパール学士院会員兼文化部門長
- 2001-02 文化・ツーリズム誌『サファリ・ネパール』編集長

## 主な著作

- 『ネパール詩歌:その諸次元』サージャ出版,カトマンズ,1987(ネパール語)
- 『ネパールの民俗文化:分析的研究』ニララ出版,ニューデリー,1990
- 『ミティラー民謡』(ネパール語訳)サファリ・ネパール,カトマンズ,1992
- 『ネパール・タライの文化遺産』ニララ出版,ニューデリー,1994
- 『ミティラーの民話』ニララ出版,ニューデリー,1996
- 『ミティラーの民俗祭事』ブック・フェイス・インディア,デリー,1998
- 『ネパール諸言語のなかのマイティラー語文化』王立ネパール学士院,カトマンズ,1999
- 『ネパールの巡礼観光』サファリ・ネパール,カトマンズ,2002
- 『ジャナクプル:ネパールの宝石』ネパール・タイ商工会議所,カトマンズ,2004
- 『ネパール文化概要』ブック・フェイス・インディア,デリー(近日刊行)

※特に記載のないものは英語で出版

## 贈賞理由

ラーム・ダヤル・ラケーシュ氏は、ネパールを代表する民俗文化の研究者であるとともに、比較文学の研究でも多大な業績をあげている。長年、同国の最高学府であるトリブヴァン大学で研究と教育に従事すると同時に、民俗研究の現地調査をつうじてネパール社会が抱える問題と向きあい、その改善にも積極的に取り組んでいる。

ラケーシュ氏の出身地は、ネパールとインドのビハール州にまたがるミティラー地方である。そこは、古い歴史をもちつつもカトマンズ盆地に中心をおくネパール国家からみれば辺境、しかし南アジアのヒンドゥー世界全体からみれば精神的な中心、という二重の性格をもつ。同氏自身も、インドのビハール大学で英語学を学び、ついでネパールのトリブヴァン大学大学院ではヒンディー文学研究で修士号を取得。さらに後年、インドのデリー大学からヒンディー語とネパール語の現代詩比較研究で博士の学位を授与された。このように同氏は、自由に現代国家の国境と専攻分野を行き来しながら、文学研究者としての自己を確立した。それと並行して民俗文化の研究にも精力的に取り組む、ネパールにおける同分野の開拓者の一人となった。

ミティラー地方は、中心都市ジャナクプルが叙事詩「ラーマヤナ」のラーマの後シーターの生誕地とされ、バラモンの伝統儀礼が強く残る一方、同地方独自のマイティリー語文学また母から娘へと世代をつうじて受け継がれてきた民俗絵画がいまも生活のなかに生きている所である。ラケーシュ氏は、文学や民話・民謡、また衣食住や生業から年中行事・祭祀儀礼に及ぶ同地方のゆたかな民俗文化を調査し、著作をつうじて世界に発信してきた。同氏の著作によりネパール文化を知り、同国を訪れる人たちも少なくない。従来、ユニークな美術作品としてのみ評価されてきたミティラー民画が、それを生みだした文化・社会の背景とともに理解できるようになったのは、同氏によるところが大きい。その過程で、同絵画の伝承者である女性をとりまく問題の大きさを同氏は痛感した。男性中心的なヒンドゥー社会のなかでも、同地方一帯は、その傾向がとりわけ強い地方である。同氏は、1999年に王立ネパール学士院会員に推挙されると同時に、ミティラー女性の経済的、社会的な自立を目ざして「ミティラー女性能力開花センター」というNGO組織を立ち上げている。

文学や文化遺産に属する民俗文化の研究での顕著な業績だけでなく、現実の問題そのものを直視して、それに取り組む「行動する知識人」としてのラケーシュ氏の活動は、「福岡アジア文化賞 — 学術研究賞」にまことにふさわしい。

2004年(第15回)受賞者

## 芸術・文化賞

# ARTS AND CULTURE PRIZE



センブクティ・アーラチラゲ・ローランド・シルワ

Sembukuttiarachilage Roland SILVA

イコモス名誉委員長

International Honorary President, ICOMOS

1933年6月5日生

Born June 5, 1933

スリランカ

Sri Lanka

## 略 歴

- 1933 スリランカに生まれる
- 1954-59 ロンドン、AAスクール(建築大学)にて熱帯建築を学ぶ
- 1957 英国王立建築家協会高等研修コース、パート1修了[59年:パート2、62年:パート3]
- 1957-58 ロンドン大学考古学研究所にてインド考古学を学ぶ
- 1960-90 スリランカ考古局課長(建築)、部長、次長、局長
- 1961-72 セイロン建築家協会準会員、特別会員、会長
- 1962 英国建築家登録審議会公認建築家
- 1963-79 スリランカ、モラトゥワ大学客員教授
- 1975-97 ユネスコの遺跡保存専門家(バングラデシュ・タイ(75年)、東南アジア文部大臣機構加盟諸国(80年)、モルジブ(83年)、カンボジア(96年)、パキスタン(97年))
- 1980-96 スリランカ、中央文化基金会長
- 1982 イコモス(国際記念物遺跡会議)のスリランカ国内委員長
- 1985 モラトゥワ大学建築学名誉修士(2000年:名誉博士)
- 1988 オランダ、ライデン大学文学博士
- 1990 イコモス委員長(93、96年に再選)
- 1992-96 スリランカ考古学者協会特別会員、会長
- 1996 スリランカ考古学者協会よりゴールド・メダル(99年:再受章)
- 1997 スリランカ建築家協会よりゴールド・メダル
- 1998 イコモスのロシア委員会より記念勲章
- 1998 ロシア建築遺跡アカデミー初の外国人会員
- 1999- イコモス名誉委員長
- 2000-03 スリランカ・オランダ協会会長

## 主な著作

- バニスター・フレッチャー著『建築史』南アジア・東南アジアの章の加筆を担当。[ロンドン, 1987] (23章: 南アジア, 24章: 東南アジア, 37章および46章: 南・東南アジア)
- 『初期・中世スリランカにおける宗教建築』デュルック:クリプス・レプロ・メッペル社, オランダ, 1988
- 『スリランカの絵画』全30巻(共著), スリランカ考古局, コロンボ, 1990
- 『マンジュシュリー・ヴァーストゥヴィディヤー・シャーストラ』ビブリオティカ・ザイラニカ・シリーズ1(共編), スリランカ考古局および中央文化基金, コロンボ, 1995
- 『承德普樂寺』(共著), 承德市文化遺産局, 北京, 2003
- 『保存理論』、『保存実践』、『建築論』、『建築史』エインシャント・セイロン, コロンボ, 2004
- 『トゥーパ、トゥーパガラ、トゥーパ・パサダ』(セイロン考古局論集No.10)スリランカ考古局, コロンボ, 2004

センブクティ・アーラチラゲ・ローランド・シルワ氏は、アジア人として初のイコモス(国際記念物遺跡会議)委員長を務めて以来、遺跡保存活動の精神的支柱であり続けている。

1950年代にはロンドン・AAスクールに留学し、同時に王立建築家協会高等研修コースを修了。この間、ロンドン大学考古学研究所で考古学を学び、さらにローマ大学などで保存修復教育を受け、88年にオランダ・ライデン大学にてスリランカの宗教建築研究で文学博士号を取得。この歩みの中で、アジアにおける遺跡保存の学問的理論化を進め、歴史学的洞察や芸術文化的な理解を深めると同時に科学的保存の手法化、適正技術の開発といった実践面での保存科学を構築していった。

1960年代からユネスコやその諮問機関であるイコモスの遺跡保存活動に多くかかわり、スリランカのみならずアジアにおける文化遺産保存の提唱者・実践家として主導的な役割を果たしてきた。その結果、イコモス委員長として三期連続で活躍。積極的にイコモスの活動をアジアに誘致し、遺跡保存への国民的理解と国民参加型の発掘現場の運営方法を確立した。とりわけ世界文化遺産を守るユネスコ・キャンペーンでアジア最大の事業となったスリランカ文化三角地帯の保存計画を企画し、基金の創出から個別の現場の保存指導に至るまで幅広く全体を総括したことは同氏の代表的な業績である。

一方、ユネスコの遺跡保存の専門家としてタイ、バングラデシュ、モルジブ、カンボジア、パキスタン各国の文化財行政を指導し、アジア各国における遺跡の世界遺産登録の拡大に尽力し、文化資産をもとにした文化ツーリズムの展開に貢献した。

また、こうした見識を活かして、フレッチャー著『建築史』における南アジア・東南アジアの加筆担当者を務めたことでも知られる。

このようにシルワ氏の業績は、遺跡の保存と観光資源化という矛盾する要素を調和させつつ、維持可能な遺跡保存の方策を提示したことであり、多くのアジアの国家と民衆に歴史遺産と歩む未来への夢と希望を与えた。以上のように、スリランカのみならずアジアそして世界の文化遺産保存活動における貢献が大であり、それはまさしく「福岡アジア文化賞 — 芸術・文化賞」にふさわしい。

日 時：9月17日(金) 14:00~16:00  
会 場：アクロス福岡シンフォニーホール

秋篠宮同妃両殿下のご臨席を賜り、大使館関係者、留学生、国際交流団体、経済団体、大学、地域団体の代表者及び市民など約850名の参加を得て行われた。

式典では、秋篠宮殿下からお言葉をいただき、映像での受賞者紹介や主催者による賞の贈呈のほか、来賓の河合正男外務省特命全権大使、河合隼雄文化庁長官(代理出席：西阪昇文化庁文化部芸術文化課長)、及び麻生渡福岡県知事の祝辞が述べられ受賞者の業績を讃えた。受賞者によるスピーチでは、4名の受賞者が受賞の喜びを表し、市民に対するメッセージなどを語った。

また、特別演奏として、大賞受賞者のアムジャッド・アリ・カーン氏らによるサロードの演奏が行われ、式典に花を添えた。



河合正男外務省特命全権大使  
による来賓祝辞  
H. E. Ambassador Kawai Masao,  
Ministry of Foreign Affairs delivering a  
congratulatory address



西阪昇文化庁文化部芸術文化課長  
による来賓祝辞  
Director Nishisaka Noboru, Agency  
for Cultural Affairs delivering a  
congratulatory address



麻生渡福岡県知事による来賓祝辞  
Governor Aso Wataru delivering a  
congratulatory address



大 賞  
アムジャッド・アリ・カーン

ナマステ！ ご来場の皆さま、こんにちは。

福岡アジア文化賞委員会に対する感謝の気持ちをどう表現すれば良いかわかりません。大賞受賞は、私だけではなく、我が祖国とインド古典音楽にとっても大いなる名誉です。私は、この大地に生まれ、古くからの伝統を世界に伝えることができたことを幸運と感じています。

私と日本の関係は何年にもなります。世界中の多くの都市を訪れていますが、1989年に東京のサントリーホールで最初に演奏したインド人演奏家となれたことは大変な幸運であると思っています。日本は、技術と電子の素晴らしさで私を魅惑してきました。この度の福岡アジア文化賞大賞受賞によって、今また私を感動させています。日本には独自の音楽があり、私はその音楽のすばらしさに敬意を払っています。

音楽は、わからなくても聴くことができます。音楽は感じ、経験されるべきものです。音楽は魂の糧であり、命への喜びです。私は、いつから自分が音楽の世界へ足を踏み入れたか、はっきり覚えてはいませんが、記憶にある限り、音楽は私の生活の一部でした。実際、たとえ一瞬であれ、私の人生から音楽が切り離されるといえることは考えることができません。我が父にして師である、伝説のハーフィズ・アリ・カーンも人生を音楽に捧げました。

今日、賢明な人は息子を古典音楽家にしようとはしません。生活が安定せず安心でないからです。過去の時代において、行者や僧だけが音楽と全能の神へ人生を捧げることができました。しかし、我が父にとっては、音楽の世界のほかに生きるすべはありませんでした。音楽は、生きること — 人生そのものなのです。彼の息子として生まれ、私は5世代にわたる音楽の遺産を受け継ぎました。それは私にとって鳥が飛ぶことと同様に自然なことでした。私たちは北インドと南インドの両方での音楽体系の基盤を確立しました。「Swar Hi Ishwar Hai」(音楽は神である)というヒンディー語の古いことわざがあります。音楽を通じて、すべての魂と、すべての宗教と、世界のすべての曲とつながっていると感じるのです。

音楽は私が祖先から受け継いだ偉大な資産であり、常に弟子たちに分け与えようとしているものです。2人の息子が我が家系の7代目を代表してサロードを弾き始めたときは、我が妻スバラクシュミと私にとって真に偉大なる瞬間でした。気を散らすことが多く、音楽的な汚染も多い現代、息子たちが演奏を続けるということは、おそらくこの伝統をさらに持続させよという神の望みであるのでしょうか。

我が妻スバラクシュミを与えたもうたことを神に感謝します。彼女は、息子たちの最初の師であったのです。彼女自身が評価の高いアーティストでもあり、彼女は私の人生における柱であり力であります。美しき魂である彼女は、芸術的インスピレーションに満ちた雰囲気を作り出し、私を駆り立ててくれます。我が息子たち、アマーン・アリ・バンガシュとアヤーン・アリ・バンガシュはともに勤勉で才能があるとともに親切な人間であり、今日の若者の模範としての彼らを見るとき私は誇らしい気持ちになります。そして私の家族があるのも、私の音楽探究の旅に非常に大きな役割を果たしてくれている献身的な弟子たちと、そしてもちろん世界中の音楽愛好家があればこそこのことなのです。

福岡アジア文化賞委員会から認めていただいたことは、本当に大きな満足であります。文化賞委員会がレベルを高く保っておられることを知ることは、もったいなくも心励まされることであります。大賞受賞者は世界中の4000名もの人々により選出されたのですから。謹んで賞を受けますことは、私の榮譽であります。ありがとうございました。



学術研究賞  
リ・イー ニン  
厲以寧

本年の福岡アジア文化賞学術研究賞を授与していただき、まことに光栄に存じます。

私は経済学を専攻する北京大学の教授です。長年にわたって、中国の経済体制改革の研究に携わってきました。私の年来の主張は、中国経済改革の最終目標を、計画経済体制から市場経済体制に移行することです。改革の方法は、国有企業の所有権の徹底的改革です。具体的には、国有企業を投資主体を多元化する株式会社に転換させるのです。そのためには一方で、政府機能を徹底的に転換することが必要です。つまり政府を「全能政府」から、「管理者として企業にサービスを提供する政府」に転換させることです。他方では、資本市場を一層発展させることです。国有企業の改革によって生まれてくる失業者の再就職問題を解決し、また農村から都市部に流入してくる過剰労働力を解消するために、私営企業の発展を支持し、奨励しなければなりません。ここ二十数年来、私はこの問題をめぐって研究を進めてきました。私の政策提案は、次第に中国の指導者に受け入れられ、いまでは政府の様々な政策に反映されています。

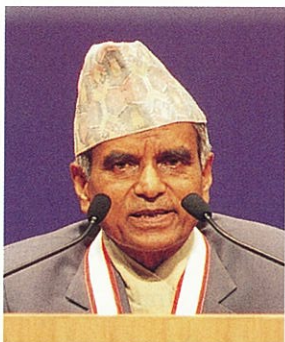
私は、福岡アジア文化賞委員会の専門家の方々による中国の経済改革に対する理解と支持に対し感謝するとともに、私の研究成果に対する評価に深い謝意を表明したいと存じます。

中国経済は急速に発展しつつあります。これは、中国政府が市場経済への誘導を目指す経済改革を推進してきた成果であります。中国経済の発展における様々な問題は、改革を通じてのみ解決することができます。それゆえに、中国の経済改革は、引き続き進展していきます。私は皆様のご厚情とご期待に背くことなく、中国の「わ へい く つ き 和平崛起(平和台頭)」を実現するために、微力ながらも、引き続き貢献したいと思っております。

皆様、経済が益々繁栄しつつある中国は、必ず世界の平和と発展に大きく寄与することができると同時に、中国とアジア諸国との友好往來を促進させていくことを信じて頂きたいと思っております。

皆様、心より感謝いたします。なお福岡市の皆様のご多幸をお祈り申し上げ、そして福岡市が益々世界の文化交流の面において、さらに大きな役割を果たすことを心よりご期待申し上げます。





学術研究賞  
ラーム・ダヤル・ラケーシュ

先ず、このような栄えある賞を与えていただいた福岡アジア文化賞委員会に心から感謝いたします。

ネパール人初の受賞者として、2004年(第15回)福岡アジア文化賞学術研究賞を受賞することを大変嬉しく光栄に思います。この受賞を大きな励みとし、ミティラー民俗文化のさらなる調査研究に励む新たな一歩にしたいと考えます。この賞は、私の人生に新しい春を運んでくれました。これからよりいっそう精力的に研究活動を再開しようと意気込みもいただきました。ですから、2004年(第15回)福岡アジア文化賞学術研究賞に私を選んでいただいた委員会の皆様、誠にありがとうございます。

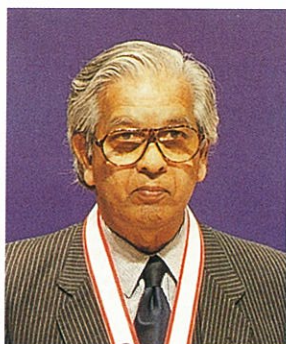
ここで、ミティラーとミティラー文化について少し説明させてください。ミティラーは非常に古い歴史をもつ古代王国です。首都はジャナクプルでした。王様の名前はシラドゥワージュ・ジャナクです。シーターという従順な娘がいて、シーターはアヨーディヤーの王ダシャラタの息子、ラーマと結婚しました。こうしてミティラーはネパールとインドの文化の架け橋となったのです。世界的に有名な叙事詩『ラーマヤナ』は彼らの人生の様々な出来事やエピソードを描いたものです。

マイティリー語はネパールの第二の言語です。ミティラーは文化の要塞として、ネパール、インド、その他外国の広大な地域に暮らす人々の栄えある過去の原動力であり、その過去を偲ぶ地でもあります。また、古くから、キラータやカルナータ、マッラ時代のようなネパールの様々な王国間の文化をつなぐカギでもありました。これらの時代はミティラー文化が大きく花開いた時です。特にマッラ時代は、この素晴らしい伝統があらゆる点で発展した黄金期と考えられています。ミティラーは、口頭伝承や民俗文学など多くの分野に見られるように、色彩豊かな民俗文化に彩られた古代文明なのです。

福岡アジア文化賞は、私たち独自の文化が交流し互いに学び合い、さらにアジア全体の多種多様な文化が融合しさらに発展するのにふさわしい機会を提供してくれます。

私は日本で賞をいただくことを特にうれしく思います。日本にはこれまで二度来たことがあります。このような素晴らしいイベントを開催してくださり、私と妻を招待してくださった福岡市の皆様に心から感謝いたします。私たち二人とも、たいへん光栄に思っています。福岡は素晴らしいまちで、市民の皆様は大変友好的です。

福岡アジア文化賞が、これからも、アジアの学術、芸術、文化に多大な貢献をした人々への敬意を具現化する担い手でありつづけることを期待します。



芸術・文化賞

センブクティ・アーラチラゲ・ローランド・シルワ

栄えあるアジアの芸術・文化賞を受賞することは、私の人生で本当にうれしい瞬間です。同時にこの賞が「人類と呼ばれる種の進化した状態」における最高の発展に対して与えられることにも喜びを覚えます。私はスリランカ科学発展協会での講演で「人類と呼ばれる種」の発展をたどり、その最高の達成が「文化」と呼ばれる要素の成長にあることを説明しました。また、人間は動物とは違うという認識のもとに「開発指数」を変えて、人間の成長を測定できるようにするべきだと世界銀行に要請しました。言い換えれば、人間は「文化」や「宗教」という最高の達成度合いによって評価されるべきであり、ただ単に、動物の世界を評価する測定単位である「食料かご」の中にくくられるべきではないということです。つまり、現在の評価の指標である「生活の質」を「満足の質」のような新しい尺度に変えるように提案したのです。

また、インドネシアのジョグジャカルタで、世界の文化人たちに自分の専門分野である「人類の遺産」について発表した時、「機械というモンスター」の発明により、人間は急速に「多額の給料」と「多すぎる余暇」を抱える不安な状況に向かっていると言いました。このモンスターの恩恵で最も発展した大陸であるヨーロッパは、2010年までに、人間の労働時間が週3日に減るという事態を迎えるでしょう。このような「行き過ぎた余暇」現象の解決策は、より明確な方法で「余暇を吸収する」ことです。一例として、人類の残した「多くの歴史遺産を訪ね」、過ぎ去った時代の物言わぬ文明の魂を楽しみ、その遺産に眠る考えを引き出してはどうでしょうか。1881年にフランスの芸術大臣が言った「カルカソンヌやアヴィニョンを保存することで中世の時代の権力のあり方がわかる。これら文化遺産という石の本の中から歴史の魂がうかがえる」という言葉を思い出してください。かつて私たちは、これらの歴史遺産を「物言わぬ友」と呼び、「人間は歌い泣くことができ、動物は叫びうめくことができるが、遺跡は、物言わぬ動かぬ友として何世代にもわたり寝ずの番をしている」と言っていたのです。

皆様、私はこれまで多くの講演で、「文化は、人間が達成した最高の進化レベルを示す指標である」という考えについて話してきました。そしてそれらを4冊の本にまとめました。アジアでもっとも進化した国である日本の「文化のまち」福岡からこのような形で認めていただいたことを誇りに思います。アジアの芸術・文化賞受賞者として謹んでこの栄誉をお受けいたします。そして、私はこの「文化の喜び」を広める努力を続けていくことを、福岡の皆様にお約束します。私は「食べ物、飲み物が人間の日々の食生活の一部であるように、文化も人間の日々の欲求の一部であるべきだ」と信じています。進化のプロセスは、すべての人々が「文化の喜び」を実感できるまで継続されなければいけません。福岡の皆様、この「全人類にとって新たに認識された欲求」に光をあててくださったことに感謝いたします。皆様が造ってくださったこの道が、すべての人々が「日々の食事」として「文化の喜び」を吸収できるようになるまでの永久的な光の標識となることと信じています。

皆様、妻とともにお礼を申し上げます。福岡市長、福岡の皆様、文化に関心をお持ちの皆様、本当にありがとうございました。

### 珠玉のインド音楽

日時：9月18日(土) 14:00～17:00

会場：イムズホール

参加者：約400名



1 テーマ 天と人をつなぐサロード

2 プログラム

インド音楽解説	中部高等学術研究所教授	藤井 知昭
パフォーマンス	大賞受賞者	アムジャッド・アリ・カーン(サロード) アマーン・アリ・バンガシュ(サロード) アヤーン・アリ・バンガシュ(サロード) シャファート・アフマド・カーン(タブラ) 山本 周司(タンブーラ)

### 3 概要

コンサートに先立ち、藤井氏がアムジャッド・アリ・カーン氏の功績を紹介するとともに、インドの古典音楽の特徴や魅力を西洋音楽との違いを例に挙げながら説明した。

前半のステージでは、カーン氏がサロードという楽器の構造などを紹介し、独特の演奏法について「指の腹ではなく爪の先で弦を押さえることで、人間の声を生み出すことができる」と説明した。そして当日がガネーシャという象の神様の誕生日に当たることにちなみ、『ラーガ・ガネーシャ・カリヤーン』を演奏した。静かに聞き入る聴衆に対してカーン氏は「インドの音楽は聴衆も一緒に感じる事が大事。恥ずかしながら自分を表現してほしい」と語りかけた。

後半のステージでは、まずカーン氏の息子のアマーンとアヤーンが『ラーガ・バゲシュワリー』という曲を演奏した。続いてカーン氏も加わり「先祖から代々受け継いできたサロードの音楽が皆様の心に届き、さらなる祝福を受けて今後も継承されていくことを祈っている」とスピーチしたあと、全員でベンガル地方の民謡『バティヤール』とアッサム地方の民謡『ビフ』を、最後に『ラーガ・キルワーニ』を披露。演奏が終わると、会場からは盛大な拍手が沸き起こった。

演奏終了後にはロビーでサイン会が行われ、興奮覚めやらぬファンが長い行列をつくった。



シャファート・アフマド・カーン氏  
Mr. Shafaat Ahmed Khan



アマーン・アリ・バンガシュ氏  
Mr. Amaan Ali Bangash



アムジャッド・アリ・カーン氏  
Mr. Amjad Ali Khan

中国経済セミナー

日 時：9月18日(土) 18:00~20:00  
 会 場：アクロス福岡イベントホール  
 参加者：約180名



1 テーマ 日中協力は東アジアの経済統合を促すか？

2 プログラム 趣旨説明・出演者紹介 慶應義塾大学総合政策学部教授・学部長 小島 朋之  
 基調講演 学術研究賞受賞者 厲 以 寧

パネルディスカッション

・パネリスト

株式会社トクスイコーポレーション代表取締役社長

拓殖大学国際開発学部教授

・コーディネーター

厲 以 寧

徳島 千穎

渡邊 利夫

小島 朋之

3 概 要

冒頭で小島氏は厲氏の業績に触れ、①中国の目覚ましい経済発展に貢献した②経済改革を推進する人材を多数育成した③日中の友好関係の発展に貢献した、という三点を強調した。

基調講演で厲氏は、中国の経済改革の注目すべき点や今後の展望を語るなかで、「政府機能の転換」「私有財産の保護」「所得分配の調整」を推し進めることの重要性を主張した。さらに農民や都市の失業者に対する政策も紹介し、「中国の経済は今後も発展する。それは東・東南アジアにとっても非常に有益なこと」と前途の明るさを明言した。

また最後に、日本と中国が今後お互いに協力し、優位性を補完しあうことの必要性を訴えた。

パネルディスカッションでは、まず徳島氏が「中国経済は日本経済にとって一つの生命線である」とした上で、エネルギー問題や農業政策など中国経済の抱える問題点を指摘。続いて渡邊氏が中国経済の外資系企業への依存度の高さを取り上げ「国民経済の産業連関構造の密度を深める方向への政策転換が必要ではないか」と示唆した。それに対して厲氏は、外資への依存度は大きな問題ではないとし、中国が今後20年間7%の成長率を維持できるという根拠を示した。熱い議論が繰り広げられるなか会場からも多くの質問状が寄せられ、中国経済に対する関心の高さをうかがわせた。

最後に小島氏が「日中間に常に政治の問題が横たわるなか、経済の相互補完関係を固めていくことが極めて重要になってくるのではないかと提言し、締めくくりの言葉とした。



厲 以 寧氏  
Professor Li Yining



小島 朋之氏  
Professor Kojima Tomoyuki



徳島 千穎氏  
Mr. Tokushima Chihiro



渡邊 利夫氏  
Professor Watanabe Toshio

ネパール・ミティラー民画の世界

日 時：9月19日(日) 13:00～15:30  
 会 場：アクロス福岡イベントホール  
 参加者：約150名



1 テーマ 女性が伝承文化を担い、未来に生かす

2 プログラム 趣旨説明・出演者紹介 滋賀県立大学人間文化学部教授 応地 利明  
 講演 学術研究賞受賞者 ラーム・ダヤル・ラケーシュ  
 パネルディスカッション  
 第1部：「民画が描く世界」  
 ・パネリスト ラーム・ダヤル・ラケーシュ  
 ミティラー美術館学芸員 蓮沼 ミヨ子  
 ・コーディネーター 応地 利明  
 第2部：「伝承してきた女性の世界」  
 ・パネリスト ラーム・ダヤル・ラケーシュ  
 ネパール歯科医療協力会理事 森 淳  
 ・コーディネーター 応地 利明

3 概 要

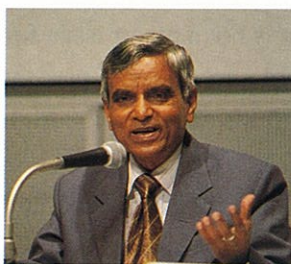
大小のミティラー民画が展示された華やかなステージで行われたフォーラムは、まず応地氏が地図を示しながらミティラー地方の説明をした。

第1部では、蓮沼氏がミティラーで撮影した写真を見せながら、実際の儀礼や女性たちが家の床にアリパン\*を描いている様子などを紹介し、「紙に描くようになって自己を表現するチャンスを与えられた」と語った。続いてラケーシュ氏がミティラー民画の精神的な背景や技法などを具体的に解説し、「その土地に住む人々の過去の経験と現在の生き方を表現したもの」と説明した。会場からは、紙に描くようになった経緯や、絵の具の種類や色の選び方など、ミティラー民画の詳細に関する質問が相次いだ。

第2部では、森氏が歯科医療のボランティア活動を通して見たネパールの女性たちを映像をまじえて紹介し、「村ではほとんど発言権のない女性たちが、自分や子どもたちのために健康づくりのボランティア活動を行い、奮闘している」と称えた。ラケーシュ氏は、ミティラーの女性たちの絵画に対する熱意や、自立に向けた商業的な取り組みを紹介し、「彼女たちの将来は輝いている」と語った。会場からは、収入を得るようになった女性たちの変化や、差別問題に関する質疑がなされ、女性エンパワーメントグループのオーナーによる搾取や身分・民族間の差別といった根底にひそむ問題が浮き彫りになった。

フォーラム終了後も参加者は、展示されたミティラー民画を熱心に鑑賞していた。

\*アリパン：儀礼時に描かれる幾何学模様の絵



ラーム・ダヤル・ラケーシュ 氏  
 Dr. Ram Dayal Rakesh



応地 利明 氏  
 Professor Ohji Toshiaki



蓮沼 ミヨ子 氏  
 Ms. Hasunuma Miyoko



森 淳 氏  
 Ms. Mori Jun

歴史と未来が融合する文化遺産

日 時：9月19日(日) 16:00~18:00  
 会 場：アクロス福岡イベントホール  
 参加者：約120名



1 テーマ 守るココロは、創るココロ

2 プログラム 趣旨説明・出演者紹介 九州大学大学院芸術工学研究院助教授 藤原 恵洋  
 パネルディスカッション

・パネリスト	芸術・文化賞受賞者	S・ローランド・シルワ
	早稲田大学理工学部教授	中川 武
	東京大学生産技術研究所助教授	村松 伸
・コーディネーター		藤原 恵洋

3 概 要

冒頭で藤原氏がシルワ氏の業績を説明するとともに、「文化遺産が私たちの生活や未来とどのようにつながっていくのかを考えたい」とフォーラムの目的を語った。

パネルディスカッションでは、まずシルワ氏がスリランカ文化三角地帯について映像を使いながら詳しく紹介し、「多くの遺産と過去の人々の業績から知識とひらめきを得ることで、未来へと進むことができる」と語った。また、中川氏がアジアの中でも珍しく歴史的時代区分による文化形態がはっきりしているスリランカと日本の類似性を指摘すると、シルワ氏は「大陸に対峙しているスリランカや日本には、島国文化という共通点があるからだ」と答えた。さらに村松氏が、インドの文化に対するスリランカの独自性についての質問を投げかけるなど、熱心な討議が行われた。

後半では、中川氏が手掛けているカンボジア・アンコールとベトナム・フエでの文化遺産の修復活動や、村松氏が取り組んでいるmAAN\*の活動内容が映像を使って紹介された。

また、会場からの「富士山は世界遺産になれるのか」という質問に対して、シルワ氏は「富士山は既に人々が国際的な価値を認めており、世界遺産に登録されるべき重要な遺産である」と答えた。

最後に藤原氏が「文化遺産を守り、それぞれの地域の魅力を高めることは、豊かな未来を創っていく可能性に満ちあふれている」と述べて、締めくくりの言葉とした。

\*mAAN: modern Asian Architecture Network(アジア近代建築ネットワーク)



S・ローランド・シルワ氏  
Dr. S. Roland Silva



藤原 恵洋氏  
Professor Fujihara Keiyo



中川 武氏  
Professor Nakagawa Takeshi



村松 伸氏  
Professor Muramatsu Shin

学校訪問  
SCHOOL VISITS

◆◆ 福岡西陵高等学校

日 時：9月16日(木) 10:00～12:00

訪問者：大賞受賞者／アムジャッド・アリ・カーン

生 徒：1、2年生 約800名

生徒たちは、初めて触れるインド古典音楽に少しとまどい気味でしたが、アムジャッド・アリ・カーン氏がリードし、みんなで一つの旋律を歌うと、自然と気持ちが一体になり、サロードの響きに心を奪われていました。同校の管弦楽部とのコラボレーションでは、「音楽はあらゆるものを超える」というカーン氏のメッセージをうけて、生徒たちが世界平和を願い選んだ、ビートルズの「イマジン」を一緒に演奏しました。管弦楽部とのワークショップも行われ、バイオリンの生徒が、カーン氏が指示したインド音楽の旋律を再現しようとしませんが、なかなかうまくいきません。「考えるのではなく、音楽を感じなさい」というカーン氏の言葉に、生徒たちは、ただ楽譜を再現するのではなく、音楽そのものを楽しむことを学びました。



◆◆ Fukuoka Seiryō High School

**Date & Time:** 10:00 - 12:00  
Thursday, September 16, 2004

**Visitor:** Mr. Amjad Ali Khan, Grand Prize Laureate

**Students:** Approximately 800 first- and second-grade students

At the beginning of the program, students looked a bit bewildered at the sounds of Indian classical music they heard for the first time. Students, however, gradually seemed to be eased of tension and started to capture the sound of the sarod as Mr. Amjad Ali Khan encouraged them to sing together.

In a collaborative performance with Mr. Khan, the school orchestra members enjoyed playing one of the Beetle's numbers, "Imagine." Learning Mr. Khan's belief of "music transcends all," they chose the song wishing for the world peace. A workshop with the orchestra members followed, in which students playing the violin tried to reproduce the specific melodies of Indian music instructed by Mr. Khan, finding them quite difficult to follow. "Don't think. Feel the music," was Mr. Khan's advice. Students learned music was not simply to read music notes but to feel and enjoy by heart.



## 学校訪問 SCHOOL VISITS

### ◆◆ 城香中学校

日 時：9月16日(木) 8:45～9:35

訪問者：学術研究賞受賞者／厲以寧

生 徒：1～3年生 約350名

「足の速いウサギが油断してカメに負けるという「ウサギとカメ」の話には、実は続きがあります。」意外な話の展開に首をかしげる生徒たちに、厲以寧氏は話を続け、最後はお互いに協力してウサギもカメもともに勝つというストーリーを通じて、日本と中国の協力関係の大切さを生徒に語りました。

また、詩人としても有名な氏は自ら筆をとり、努力をすることの大切さを書いた漢詩を生徒にプレゼントしました。

その後は、生徒たちと中国式のジャンケンを楽しむなど、なごやかな交流が続きました。

### ◆◆ Joko Junior High School

**Date & Time:** 8:45 - 9:35  
Thursday, September 16, 2004

**Visitor:** Professor Li Yining, Academic Prize Laureate

**Students:** Approximately 350 first- to third-grade students

"The Aesop's fable, 'The Hare and the Tortoise' tells us that the fast runner rabbit loses to the turtle in the race, but this story has more to follow." In front of the students who looked quite puzzled by an unexpected beginning of the story told by him, Professor Li Yining continued his talk. The ending of the story was for both the rabbit and turtle to win the race by cooperating together. Professor Li quoted the story to refer the importance of cooperative ties between Japan and China.

Also being famed as a poet, Professor Li picked up a brush and wrote a Chinese poem about the importance of working hard as a present to the students.

At the end of the program, students enjoyed playing the Chinese-style of the 'paper, stone and scissors' game in an amicable manner with Professor Li.





学校訪問  
SCHOOL VISITS

◆◆ 福翔高等学校

日時：9月16日(木) 14:40～15:30

訪問者：学術研究賞受賞者／  
ラーム・ダヤル・ラケーシュ

生徒：1年生 約320名

ラーム・ダヤル・ラケーシュ氏が、自身の体験や研究を講演しました。少年時代は本ばかり読んでいたと語るラケーシュ氏。文化研究の道を志すきっかけは「文学は人生を写す鏡だと思った。その国の栄枯盛衰は、その国の文学作品に表れる」と気がついたからだと言います。

講演後、意見交換会やお茶、お琴といった日本文化をつうじての交流で、生徒たちと楽しいひとときを過ごしました。

◆◆ Fukusho High School

**Date & Time:** 14:40 - 15:30  
Thursday, September 16, 2004

**Visitor:** Dr. Ram Dayal Rakesh, Academic Prize Laureate

**Students:** Approximately 320 first-grade students

Dr. Ram Dayal Rakesh spoke about his experience and studies in front of the students. He said he was a bookworm in his boyhood. Why he entered the career as a scholar of cultural studies, he said he noticed that literature is a mirror which reflects our life. The prosperity and decline in a country is reflected in literature works in the country.

After the talk, they enjoyed a relaxing time, exchanging views and going through the Japanese culture of tea ceremony and koto performance.



## 学校訪問 SCHOOL VISITS

### ◆◆ 博多工業高等学校

日 時：9月16日(木) 12:45～15:35

訪問者：芸術・文化賞受賞者／  
S・ローランド・シルワ

生 徒：2、3年生(建築科) 約90名

S・ローランド・シルワ氏が、建築科の生徒たちを対象に、スリランカの世界遺産の保存修復を例にあげながら、守るという視点からの建築学の広がりについて講演を行いました。

また、自身の学生時代を振り返りながら、生徒たちに「どんな授業を受けている時でも、そして人生のどんな瞬間であっても、今、自分がしている事が世界で一番大切だということを忘れないでください」、「たくさんの知識を身につけて、それを広く社会に、日本だけではなくアジアそして世界全体に伝えることができる人間になってください」と熱く語りました。

その後、茶道部による茶席のもてなしや、異文化研究部との座談会で生徒たちとの交流を楽しみました。

### ◆◆ Hakata Technical High School

**Date & Time:** 12:45 - 15:35  
Thursday, September 16, 2004

**Visitor:** Dr. S. Roland Silva, Arts And Culture Prize Laureate

**Students:** Approximately 90 students majoring in architecture

In front of the students in the Architecture course, Dr. S. Roland Silva spoke about how far the subject 'architecture' goes from the view point of 'protection,' taking conservation activities of the world monuments and sites in Sri Lanka.

Also reflecting his college life, he said, "whatever lesson you take at any moment in your life, do not forget that what you do right now is the most important thing in the world. Try to acquire as much knowledge as possible and be a man who is able to pass the knowledge to people in Japan and the world."

At the end of the lecture, Dr. Silva was invited to the tea ceremony hosted by tea ceremony club members. Members of the cross-culture club also enjoyed an informal talk to exchange their views with the laureate.

